

校 園 名：山口大学教育学部附属光中学校

所在地：〒743-0007 山口県光市室積8-4-1

電話番号：0833-78-0007

記載日：平成28年 5月12日

記載者：荒瀬浩一

記載者役職：副校長

貴校の校風、おおまかな特色について：

<学校教育目標>

社会の変化に柔軟に対応し、強く・正しく・美しく生きる生徒の育成

<本年度の重点目標>

- (1)学力向上「学び意欲を高める」授業づくり
- (2)地域社会の一員としての社会力を高めるための学習・道徳・特活の一体的指導の推進
- (3)学部や附属小と連携・協働した地域の特色あるモデル校としての機能向上

<校風・特色など>

- ・瀬戸内海国立公園の中に立地した、自然と歴史遺産に恵まれた学習環境である。
- ・附属光小学校と隣接し、年1回の研究発表大会を合同で開催している。平成28年度テーマ「新たな価値を創造する子どもを育てる（3年次）～学びが広がる授業のデザイン～」
- ・地域に根ざした教育活動の展開を小中合同で取り組んでいる。
- ・生徒の自主性、創造性の涵養のために生徒会を中心とした活動を重視している。年間最大の行事である「附中祭」は特に有名で、Wikipediaにも紹介されている。
- ・生徒は自由闊達であり、柔軟な発想をもっており、創造性に富んでいる。特に合唱や演劇など、表現における活動に熱心に取り組んでいる。
- ・理数科教育における実績として、平成27年度「科学の甲子園ジュニア」山口県代表、平成27年度 Rimse 奨励賞など多数あり。
- ・産学連携を重視しており、(株)トクヤマとのコラボレーションによるキャリア教育に関する授業などを行っている。
- ・キャリア教育の一環として、2年生の3月に東京方面に修学旅行を実施している。官公庁や一流企業を訪問し、それぞれ個人テーマを設定し取材活動を行うことなどを通して、自身のキャリア形成に役立てている。

貴校の卒業生の活躍状況について：

- ①追跡調査：未実施
- ②状況の把握および管理：同窓会組織（峨嵋山会）においてデータ保存（申告されたもののみ）
- ③卒業後は、官公庁、企業等で活躍している卒業生も多数。

貴校勤務経験者の先生方が公立学校・教育委員会などへ戻られた後の活躍状況について：

- ①追跡調査：未実施
- ②状況の把握及び管理：同人会名簿により把握
- ③本校から異動後は、地域の学力向上に貢献すべく、中核的な教員として活躍している。

魅力のある、特色のある、または、今後、公立学校へも展開できそうな先導的な取り組みなどについて：

(1) 総合的な学習の時間（GABI）について

G (Gate)・・・同学年で構成される集団を単位とした学びにより、課題追究に必要な基礎的な能力を身につける。(1年生)

(実践例)「話し合い活動の充実のために」
「人間関係づくりプロジェクト」

A (Approach)・・・異学年で構成される集団を単位とした学びにより、よりよい表現を目指して課題を追究する力を身につける。

(実践例)「ひかり太鼓」「演劇」「動画」など

B (Branch)・・・学年で設定したテーマに沿って小集団ごとに課題を立て、他者と協力しながら課題を追究する力を身につける。

(実践例)「イベントの企画立案」「市長と語ろう」

I (Integration)・・・これまでに身につけた課題追究の経験を活かしながら、個人単位で自らの課題を追究し解決する力を伸ばす。

(実践例)「修学旅行」「自分のキャリアマネジメント活動」

(2) 附中祭について

○特徴

(1)生徒会により決定された「年間統一テーマ」を具現化する場として、本校生徒が最も大切にしている文化、体育の総合的複合行事である。

(2)「文化部門」「広場部門」「体育部門」の3部門で構成され、それぞれ「委員長」「部門長」「係長」など、生徒のリーダーが自主的な運営を行う。

○各部門について

(1)文化部門

- ・総合的な学習の時間「A」について、各グループ（クラブ）による発表を行う
- ・合唱コンクールを行う。その際、各クラスとも課題曲として、毎年生徒会により制作される「テーマソング」を歌う。
- ・管弦楽部演奏ならびに県合唱コンクール出場メンバーの合唱など、高レベルの音楽鑑賞を行う
- ・光市民ホールを終日借り切り、学習の成果を広く保護者、地域の方々に公開する。



(2) 広場部門

- ・総合的な学習の時間「A」において制作された作品及び文化系の部活動で制作された作品の展示を行う。
- ・生徒の自由な発想を活かし、全校参加のイベントを企画、運営する。
- ・生徒、教職員がそれぞれに自分の特技を披露することにより、表現活動のすばらしさを体感する。
- ・模擬店等の出店を企画、運営することにより、自治能力の涵養を図る。



(3) 体育部門

- ・日頃の学習の成果を発表する場として、附中祭の最後に位置づけられる。
- ・運動的な活動の他に、フォークダンスなど本校伝統のプログラムを織り込む。
- ・附中祭を締めくくる行事として、総合閉会式を行い、学習の成果を全員でシェアする。



総合的な学習の時間と附中祭は密接な関係にあり、その相関関係が生徒にとって大きな教育的効果をもたらしている。また、生徒会活動の充実や生徒の自治活動を通して、生徒指導の3機能（自己決定の場を与える・自己存在感を与える・共感的人間関係を育成する）を伸長する教育活動となっている。このような一連の活動を通して、本校生徒は豊かな表現能力を身につけ、それを中学校卒業後のそれぞれの進路において存分に発揮している。

今後は、小中一貫校としての取組の中で、どのように小学校の教育課程にこれらの活動を位置づけていくか、ということが大きな課題になる。その際、特に本校がこれまで取り組んできた「生徒会活動」を基軸に据え、小中の9年間を通観した学習活動をどのように仕組んでいくか、ということテーマに研究を深めていきたいと考えている。「生徒指導」や「学習指導」を軸にした小中連携の例は全国的にも散見されるが、生徒会活動をその中心に据えるというのは、ある意味において提案性に富んだ取組ではないかと考える。生徒の自主性、創造性を豊かにはぐくむことを常に念頭において教育活動を行ってきた本校ならではの、新しい形での小中一貫教育を、このような取組の中から広く地域社会に提案できるのではないかと考えている。

地域において、現在、貴校はどのような存在であると考えますか：

地域においては、特に学力向上においてリーダー的な役割を果たしていると考えます。県教委と連携した事業である「授業アドバイザー」制度をはじめ、各公立中学校での校内研修会における指導助言者や、県学力向上推進委員会への参加など、さまざまな取組を通して地域に貢献している。

いっぽう、山口県はコミュニティ・スクールへの取組において全国的にも先鋭的な位置にあり、特に光市内はその先駆者として全国的にも注目されている。本校はコミュニティ・スクールとしての活動は行っていないが、独自の「附属光中ボランティアプロジェクト」を本年度から稼働させ、地域貢献への取組をスタートさせている。

附属学校の存在意義、貴校の存在意義について：

全国的な趨勢として、附属学校園の存在意義が問われているが、本校はこの山口県光地域にとって、大きな存在意義をもつ学校であると考えている。本校の考える存在意義は、以下の3つである。

(1) 教育実習実施校としての役割

国立大学教員養成学部の附属中学校として、教育実習に特化したノウハウと実績を有している。本校における教育実習は、宿泊棟を活用したまさに「寝食を共にした」実習であり、単なる教材研究、教科指導研究にとどまることなく、教員としての精神的な部分でのトレーニングにも大きな効果があると考えている。また、本校でのノウハウを公立中学校にも積極的に発信し、地域の若手教員の教育力向上に役立てている。特に平成28年度から、光市教育委員会と連携し、新規採用教員の研修の一環として、新採教員担当指導教諭の研修の場として本校を活用するなど、副次的、多角的な貢献を果たしつつある。

(2) 大学と連携した教育実践研究機関としての役割

研究機関としての大学を設置者とする本校は、大学（教育学部）の各研究領域の研究者と共同して教育実践研究を進める役割を担う。研究プロジェクトは教育学部で毎年公募され、採択された各プロジェクトには相応の経費が配分される。本校は前年度、国語科、理科、音楽科、技術科、家庭科など計7つのプロジェクトにかかわり、それぞれの教科・領域の教員が大学教員と共同で教育実践の研究を行った。ここで得られた知見は本校の教育のみならず、大学での教員養成のカリキュラム内容にも反映され、大学教育の質的向上に重要な貢献を果たしている。

(3) 地域の教育活動における先進校としての役割

本校は、現在小中連携による教育活動を研究しているが、平成30年度より小中一貫校として新たなる教育活動を展開しようと考えている。全国で小中連携校、小中一貫校、さらには義務教育学校など、義務教育9年間を総合的に捉えた教育活動の重要性が唱えられているが、この地域においても「連携・協働」を合い言葉に、小中連携や小小連携などの取組が活発に行われている。そんな中で、本校が目指す「小中の枠組を残した小中一貫教育」は、公立校にとって必ずや大きな示唆となると思う。また、教科指導や、新たに教科化される道徳教育についても先進的な取組を続けており、今後も地域教育界への貢献を続けていけると考えている。

(4) 人材育成の場としての役割

本校のもつ大きな役割の一つに「人材育成」があげられる。公立学校との人材交流で赴任した教員が、本校での勤務を経て自分のスキルアップを図り、公立学校において特に学力向上の面で還元していることは言うまでもない。さらに本校では教職員一人ひとりのキャリアステージに応じた校内人材育成プログラムを多数展開している。一例として臨時的任用者に対する「採用試験合格対策講座」、中堅教員に対する「公立学校管理職（教頭）養成講座」、及び任意の教員集団による「教科ごとの学習会」などがあげられる。多彩な経験を有する教職員が、OJTの手法を取り入れながら切磋琢磨する環境が整備されており、昨年度も教員採用試験、管理職登用試験においてそれぞれ合格者を輩出するなど実績をあげている。今後もこれらの取組をさらに深化・発展させ、人材育成という分野において地域の中核となる学校づくりを目指して、さらに研究を深めていきたいと考えている。